

彼女が、親友に褒められた夜

待宵草

あの夜のことは、今でも思い出す。

止めようと思えば、止められた。

でも止めなかった。

最初から、どこかで分かってたのかもしれない。

あの日が、ただの飲み会で終わらないって。

---

俺、陽斗は二十八歳で営業をしている。

遼とは大学一年からの付き合いで、もう十年近い。

俺はわりと誰とでも喋る方で、遼は必要なことしか言わない。

正反対だけど、一緒にいて楽だった。

社会人になってからも月に一回は飲んでいたし、恋人ができてからは自然と四人で集まるようになった。

俺の彼女は美咲。

二十七歳。メーカーの事務。

黒髪で落ち着いていて、派手じゃないけど目を引く。

遼の彼女は紗奈。

二十六歳。美容関係。

よく喋って、距離が近くて、場を回すのが上手い。

最初は「たまに四人で飲む」くらいだったのに、気づけばそれが当たり前になっていた。

俺にとっては居心地のいい関係だった。

少なくとも、その日までは。

——

その日はうちで飲んでいた。

ピザとコンビニのつまみ。

缶ビール。

テレビは流しっぱなし。

席もいつも通りだった。

ソファの左に美咲。

隣に俺。

向かいに遼。

床のクッションに紗奈。

仕事の話をして、動画を見て、紗奈が遼をい  
じって、美咲が笑う。

本当にいつもの土曜だった。

その日、美咲はベージュのワンピースを着て  
いた。

露出があるわけじゃない。

でも妙に目に入った。

座った時の脚のライン。

髪を耳にかける仕草。

自然に何度か見ていたらしい。

紗奈がすぐ拾った。

「美咲ちゃん、そのワンピースかわいい」

「ほんと？」

「似合ってる」

美咲が笑う。

俺もそのまま言った。

「似合ってるよ」

「ちゃんと見てる？」

「見てるって」

「適当じゃない？」

「そんなわけないだろ」

それで美咲は満足そうに笑った。

紗奈がすぐ遼を見る。

「りょう、私のは？」

遼が一回だけ見て答える。

「……いつも通り」

「それ雑」

美咲が笑った。

紗奈はすぐ俺に振る。

「陽斗くんなら？」

「似合ってるよ。紗奈っぽい」

「ほらね」

その時だった。

美咲がこっちを見た。

口元は笑ってるのに、少しだけ不満そうな顔。

紗奈も気づいたらしい。

「妬いた？」

「妬いてない」

即答だった。

でもすぐ、美咲が向かいを見る。

「いいもん。私は遼くんに褒めてもらうから」

一瞬、場が止まった。

紗奈が笑う。



「え、そっち？」

美咲はそのまま遼を見る。

「遼くん」

「何」

「今日の私のワンピース、どう？」

冗談っぽく聞いている。

でも完全に冗談でもない。

遼は黙ったまま美咲を見る。